地域理解実習（清武地区）
―地域をフィールドとした実践教育の取り組み―

丹生　晃隆
（宮崎大学　地域資源創成学部）

はじめに

地域資源創成学部（以下,「地域学部」とする.）では，マネジメントの基礎知識と社会・人文科学，及び農学・工学分野の利活用技術の基礎知識を教授する異分野融合のカリキュラムを構築するとともに，各分野の教員が協働した実践的教育を行っている．地域の関係者の方々のご協力の下，宮崎県全域をフィールドとした実習，国内外のインターンシップを行っており，持続可能な地域づくりの実現のため，企画や実践の素養を身につけた人材の輩出を目的としている．

地域学部の実習の体系として，１年前期の「地域理解実習」を導入科目として，１年後期には，都市域と中山間地域をフィールドとした「地域探索実習Ⅰ」，２年前期には，県内産業及び企業を題材とした「地域探索実習Ⅱ」と続く．２年後期からのコース配属以降は，所属研究室において，地域や行政，企業に関わる個別のプロジェクト等に取り組んでいる．

本稿では，地域学部の実習の導入科目である地域理解実習について，清武地区をフィールドとした実践教育の取り組みを報告する．

1. 地域理解実習について

(1) 実習概要

地域理解実習は，前述の通り，実習の導入科目として実施するものであり，１）学部が設置する実習体系の理解，２）地域資源を理解するための基礎的知識の確保，３）実習地における地域資源の理解や地域課題解決に向けた取り組み，の３点を念頭に置いている．

実習対象地域は，大学が立地し，学生の学びの場，暮らしの場となっている，清武地区，青島地区，木花地区の３地域である．実習はクラス毎に分かれて行っており，平成30年度は，Ａクラス：清武，Ｂクラス：青島，Ｃクラス：木花であった．担当は，主担当と副担当の２名であり，平成30年度の担当は，清武地区：園弘子教授，丹生，青島地区：宮木健二准教授，戸敷浩介准教授，木花地区：桑野斉教授，西和盛准教授となっている．

(2) 達成目標

地域理解実習の達成目標は以下の５点である．

① 実習等の課外活動に係る基礎的知識及び社会マナー等の確保
② 地域資源を理解するための本県の社会・歴史・文化等に係る基礎的知識の確保
③ 本県及び地域を取り巻く共通課題等の理解
④ 実習等を通じた大学周辺地域の地域資源・地域課題の理解
⑤ 実習等を通じたコミュニケーション能力，協働能力の確保
⑥ 実習等の成果作成（個人レポート，グループレポート発表）を通じた情報収集能力・提案力等の確保

(3) 授業計画（全体）

平成30年度の全体の授業計画は表１の通りである．前段に，実習に関連した基礎的な講義（全体講義）を行った後，３地域に分かれて事前学習（下調べ）を行う．実習（１日）を行った後も，同様に３地域に分かれて事後学習（振り返り）を行う．

表１　授業計画

4月13日（金）	第1回　地域学部の実習について	全体講義
4月20日（金）	第2回　実習の基本的知識	全体講義
4月27日（金）	第3回　宮崎県の地域資源	全体講義
5月2日（金）	第4回　フィールドワーク（3地域まち歩き）	全体講義
5月11日（金）	第5回　大学立地地域の概要（宮崎市、木花地域）	全体講義
5月18日（金）	第6回　大学立地地域の概要（青島地区、清武地区）	全体講義
5月25日（金）	第7回　事前学習・下調べ	
6月8日（金）	第8回・9回（連続講義）　事前学習・下調べ	
6月15日（金）	（B、Cクラスの実習日＊Aクラスは休講）	
6月22日（金）	第10回・第11回　フィールドワーク（清武地域実習）	
6月29日（金）	第12回　事後学習・ふりかえり	
7月6日（金）	第13回　事後学習・ふりかえり	
7月13日（金）	第14回　成果報告会	
7月27日（金）	第15回　まとめ	全体講義

(4) 課題レポート（成果）

地域理解実習では，実習による学びの成果として課題レポート(A4 用紙１枚(表裏)，文字数 1,000 字以上)を課している．レポートとして取りまとめる内容は以下の３点である．箇条書きではなく，文章としてまとめることが求められている．

① 事前学習の成果（事前学習でここまでは分かったということ，事前学習で疑問に思ったこと，フィールドワークで確かめてみようと思ったこと等）
② フィールドワーク・振り返りの成果（理解したこと，確かめられたこと，新しく発見したこと等）
③地域理解実習全体（講義含む）を通じて学んだこと（学んだことに加え，反省点・改善点等を含む）

なお，レポートに加えて，各地域の概要を取りまとめた「地域シート」と，実習当日に取りまとめた「実習メモ」も併せて提出することが求められている．

2. 清武地区での実習の概要

清武地区の実習のねらいとして，地域の活性化拠点の一つである「交流プラザきよたけ『四季の夢』」を基軸とし，地域における農業生産，食品加工，販売に関わる取り組みについて学び，６次産業化に関わる現状や課題を理解できるようにする．また，清武地区における「まちづくり」の観点から，市役所や関連機関の役割について学習することもねらいとしている．

平成 30 年度は，清武総合支所での四季の夢とまちづくり協議会の方による講話に加えて，日向夏生産者とパパイア生産者，お菓子や漬物，餅などを製造する食品加工事業者の３者を訪問した．地域の社会や文化に触れるために，県内最古の発電所である黒北発電所や，国の天然記念物（大クス）もある船引神社も見学した．当日の実習プログラムは表２の通りである．

表２　清武地区の実習プログラム

8:30	大学集合
8:40	大学発
9:00～10:15	日向夏生産者訪問
10:30～12:10	清武地域まちづくり協議会の取り組み 「四季の夢」の取り組み　（於：清武総合支所）
12:10～13:15	昼食＋周辺散策
13:30	清武総合支所出発
13:45～14:55	食品加工会社訪問
15:00～15:20	黒北発電所訪問
15:30～16:45	パパイア生産者訪問 船引神社見学
17:00～17:35	まとめ・ふりかえり(於：清武総合支所)
17:50	大学着

実習のプログラムの策定にあたっては，特に以下の３点に留意している．

① 実習のテーマ性
地域の拠点施設，販売場所としての四季の夢と，実際に農産物や加工食品を出荷する生産者との関わり，宮崎市と指定管理者としての四季の夢の関わりなど．
② 地域資源の理解
清武地区の主要農産物である日向夏，パパイア，アリスメロンなど，これらを用いた加工食品の製造販売．
③ 清武という地域の理解
総合支所による講話（全体講義），周辺探索（実習当日お昼休み），総合支所の屋上からの展望など．

3. 実習の準備・実施にあたって（担当教員として）

筆者は，学部設置初年度から本年度まで３カ年にわたって，清武地区の実習担当教員を務めてきた．実習の準備や実施にあたって，特に意識や留意をしていることを以下にまとめてみたい．

(1) 実習先・訪問先との関係づくり

清武地区の実習では，実習先から，具体的な課題やディスカッションのテーマを提示していただいている（例えば，日向夏の美味しさを若者に広める方法，果物を食べてもらうための方法など）．学生は，グループに分かれてディスカッションを行い，最終的に成果報告会で方策を発表する（「お返し」をする）．お忙しいなか時間をとっていただいている実習先に対して感謝の気持ちを持つこと，これは担当教員として，学生に一番学んでもらいたいことの一つである．

(2) ケースメソッドの活用

事前学習にあたっては，各実習先のミニケースを作成し，提示された課題やテーマに関するディスカッションを行っている．ケースメソッドを用いた教育は，学生の行動を変えることが期待される（石田，2014）．ただ単に課題やテーマを提示するよりも，実際のストーリーの中で課題を考えることで，より主体的かつ実践的な学びができると考えている．

(3) 学生の興味や関心を引き出す

地域理解実習は，学生にとって初めての実習であり，ここには「楽しみ」の要素も必要である．事前学習にあたっては，実習先の生産者の日向夏やパパイア，加

工食品の試食を行った．これは，学生の興味や関心を引き出すことにも繋がる．

(4) 事前学習での「気づき」と「発見」

清武地区の実習では，事前学習で取り上げる前に，「四季の夢」を訪問し，興味を持ったことや疑問に思ったこと，気づいたことなどをまとめる事前レポートを課している．どんなに人づてに聞いた話や資料を通して予備知識を得ていたとしても，実際に現地に行って現場の状況を目の当たりにしてみると，事前の予想とは大きく食い違っていることもある（佐藤，2002）．

地域理解実習全体の課題レポートとしても，事前学習の成果，振り返りの成果をまとめることを課しているように，学生には，実習を通じて，新しい「気づき」を得ること，机上の事前学習だけでは得られない，現地での「発見」をしてほしいと考えている．

(5) 授業での工夫

清武地区の授業では，講義の感想やコメントなどを記入する講義アンケートを毎回配布している．ここに書かれたコメント等については，できるだけ次の講義でフィードバックをするように心がけている．実習内容に関する理解やコメントを返すことで，学生は，他の学生の視点から学ぶことも可能となる（これは，実際に，講義アンケートのコメントにも表れている）．

また，授業内でのディスカッションについて，事前学習では，毎回グループ構成（5人×6）を変えている．実習先からの課題やテーマについて，具体的なディスカッションを行う際にはグループは固定するが，その前には，クラス内で，できるだけ多くの学生との関わりが持てるようにしている．入学当初，また1年次最初の実習であり，達成目標の⑤で挙げる「他者との協働能力」を磨くことも，重要な意味合いを持っている．

4. 今後の課題と展望

(1) これまでの反省点と改善

担当教員として，清武地区の実習に3カ年に渡って関わり，前年度の反省を翌年度に活かすという「サイクル」を2回回すことで，「四季の夢」を基軸とした実習プログラムも「一つの形」になってきた感はある．1年目，2年目の反省点として，1）訪問先や講話が多かった（⇒2年目から現在の形へ），2）訪問先の調整に時間がかかってしまっていた（⇒早い時期からお願いをする），3）講話の内容や実習先での説明，時間超過など（⇒事前の趣旨説明を丁寧に行う）が挙げられるが，これらの反省点をできるだけ改善をするように努めてきた．

また，実習の際の学生の学習態度について，1年目はメモをとらない学生が目立ったが，2年目から「実習メモ」の提出を課すことで改善を図った．学生が自ら主体的にメモを取るような学習を促すことが本来の姿かもしれないが，メモをとるという習慣を身に付けるためのプロセスとして「実習メモ」を活用した．

(2) 今後の課題と展望

今後の課題として，まず，限られた講義時間の中で実習の効果をいかに上げられるか，実習の導入科目として，いかに「次」に繋げられる基礎力をつけられるかが挙げられる．また，1年前期の大学教育入門セミナーや情報数量スキルなどの基礎科目での学び（レポート作成，プレゼンテーション，図表作成スキルなど）との関連付けもまだ十分にできているとは言い難い．

また，地域理解実習を通じて，学生には，地域でのボランティア活動やイベントへの参加にも関心を持ってほしいと考えている．お祭りへの参加などへの実績はあるが，これらの「サービスラーニング」と実習をどう関連付けられるかも今後の検討課題の一つである．

地域理解実習は，地域学部における最初の実習であり，学生の期待もとても大きいことを毎年感じている．担当教員として，より学習効果の高い実習，地域からも感謝されるような実習となるように，今後も改善と改良を行い，同時に，地域の変化に合わせた再構築も視野に入れながら検討と準備を進めていきたい．

文献

石田英夫（編著），2014，「ケース・ブックV　地域と社会を変えた起業家たち」慶應技術大学出版会．
佐藤郁哉，2002，「組織と経営について知るための実践フィールドワーク入門」有斐閣．

謝辞

実習は，地域の受入機関様，企業様，生産者様，住民の方々など関係者の皆様のご協力，ご理解のもとに成り立っている．また，実習の実施にあたっては，事

務担当，クラス担任・副担任の先生方にも多大なご協力，ご尽力をいただいている．また，本稿では，清武地区の取り組みについてのみ報告したが，地域理解実習では，青島地区，木花地区でもそれぞれに特徴的な取り組みを行っている．担当の先生方との意見交換の中からも貴重な学びをいただいている．以上，最後に記して御礼申し上げたい．